

書評 吉原直樹著 『モビリティと場所 21世紀都市社会学の転回』

著者	松園（橋本） 祐子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	50
号	10
ページ	57-61
発行年	2009-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007142

吉原直樹著

『モビリティと場所

——21世紀都市社会学の転回——』

東京大学出版会 2008年

xi+275+xxivページ

まつ その はし もと ゆう こ
松 菌 (橋 本) 祐 子

I

本書は、アジア・メガシティのいまを捉えることを通して、「モビリティと場所」というテーマを理論的なレベルから経験的なレベルへと練り上げることをめざした都市社会学の理論書である。また、グローバル化のアジア都市の新しい地平を探る課題に、ローカリティの視点から切り込むアジア都市社会学でもある。著者は、現代都市のモダニティを理論的に解明してきた都市社会学の論客であると同時に、アジアの地域住民組織、特にインドネシアのローカル・コミュニティであるRT/RWの歴史の実証研究を行ってきたアジア研究者である。著者があとがきにも書いているとおり、本書はこの2つの流れの交点に立つものである。

ひと、モノ、カネ、情報がグローバルにモビリティをもつグローバル化の中にあって、都市空間「場所」のもつ意味、都市のローカル・ガヴァナンス、生活の場としてのコミュニティにおける人々の生活と意識の交錯などの内実を解明することは、今日のアジア都市研究者に課せられた課題であるだろう。スターバックスのようなカフェと屋台、高層マンションやゲーテッドコミュニティとスラムコミュニティの混在は、私たちが風景として目にするアジア都市の姿であるが、それは単なる経済格差を超えた歴史的な重層的な姿なのである。

評者が、タイをはじめとするアジア都市の地域社会を歩き始めた1980年代から今日まで、アジアの都市社会は大きく姿を変えてきた。これからのアジア

都市地域社会学の構想に、グローバル化を機軸に据えることは、もはや不可避であると痛感している。著者が『都市とモダニティの理論』(2002年)以来問い続けている、グローバル化とローカルのパラドクスの解明を、アジア・メガシティという舞台で深化しようとした本書は、ゆらぐ現実から理論を構想していく刺激的な著作である。

本書は2部構成になっており、I部は理論編、II部はジャカルタおよびデンパサールをフィールドとした知見にもとづいた実証編であり、II部の議論によって、I部の理論編をさらに検討する。本書の構成は以下のようにになっている。

序章 いまなぜ「モビリティと場所」なのか

I モビリティのなかの都市空間と場所

1章 モダニティの両義性とグローバル化

2章 領域と流動体の間——グローバル化のメタファーをめぐって——

3章 「社会を越える都市」とポストモダニゼーション

4章 「グローバルな市民社会」と場所のナラティヴ

5章 ローカル・ガヴァナンスと「開かれた都市空間」

II アジア・メガシティにおける都市空間の転回

6章 都市のアジア——ジャカルタを事例として——

7章 ゲーテッドコミュニティとスラム

8章 バリにおけるムスリム

9章 バリと日本人

10章 ポスト・グローバルシティの座標軸——現代アジア都市空間の転回の位相——

終章 場所を問い込む

II

本書をアジア都市の研究書としてひもとくと、第I部では容易に結論に行き着かないレトリックにややとまどう。一方で都市社会学の理論書として読んでいくと、第II部の詳細部分については、インドネシア都市の歴史的社会的理解なしにはイメージをつ

かみにくい側面もある。少し長くなるが、内容を概観しておこう。

1章では、グローバル化をモダニティの両義性の下に捉え、モビリティの諸相が述べられる。モダニティの両義性＝多義性を、空間論的転回の現状とグローバル化のいまをふまえながら、さまざまな角度から照射する。

2章では、アーリの議論に依拠して、グローバル化を問い込んでいく。グローバル化とは、領域＝構造のメタファーから流動体＝ネットワークのメタファーへの移行、テクノロジーによってヒト、モノ、カネ、イメージが瞬時に「社会」を越えてフローすることであり、脱領域化することである。さらに、脱領域化の多面的側面として、カステルが「コミュニティから相互作用を組織化する中心形態としてのネットワークへのおきかえ」と捉えるコミュニティの解体―再編の過程を抱合しながら進行する、はなれたネットワークの広がりを見出す。

つづいて、オルブロウの言説をひきながら、脱領域化から再領域化への転相を確認する鍵は、非場所であり社会関係の領域だと示す。すなわち、脱領域化はグローバルなフローがもたらした多様な社会的形態のひとつであり、再領域化は脱領域化が自らのゆらぎの過程のなかで偶有的にもたらしたひとつの社会的形態なのである。しかし一方で、脱領域化から再領域化への道筋における開放系として措定される社会関係的な領域は、容易に閉鎖系に反転する危険性、「閉じたコミュニティ」への方向性をはらんでいることも指摘する。そして、経済・政治過程と意識行為過程を媒介するロジックの解明に加えて、グローバル化の動的な変動メカニズムを、行為や集合体から立ち上がる「創発性」(emergence)に即して明らかにすることを課題として設定する。

3章では、「社会を越える都市」が「社会／国家のなかの都市」にかかわって、ナショナルな枠組みの「脱全体化」の担い手として躍り出てくることが示される。東京のミッドタウンを例にとりながら、「社会を越える都市」が、市場関係の擬態としてあるグローバルな関係によって構造化され調整され、動的に開かれた空間であればあるほど、そこに内在する

潜在的なカオス(分極化／分断化を含めて)が制御されるべきリスクに読み替えられ、その除去が不可避になっている現実を指摘する。

しかし、開放性と排他性の両義性をもった存在である「社会を越える都市」は、あらたな「むすびつき」の可能性をもつ。「社会を越える都市」は、その課題として国家の退場の後に激化した社会的不平等、分極化の動向を変成し、大小さまざまなネットワークを社会の前面に出す「整流器^{レギュレーター}」としての役割が期待されるのである。

4章では、モビリティとのかかわりで「グローバルな市民社会」のあり方をシチズンシップの変容とのかかわらせて論じ、「グローバルな市民社会」が深く根をおろしているローカルなものとの場所について検討している。国家は、財やサービスを直接供給することから、財やサービスの供給を統制する触媒として、重要な機能を担うようになる。

グローバル化の中での場所理解は、マッシーが「場所のオルターナティブな解釈」とよぶもの、「社会的諸関係と理解のネットワークが根茎状に節合され、しかも外に向かって開かれている情景」を念頭においてなされる。このような場所理解の要は「つながり」、「できごと」の身体化の感覚を伴い、「住まうこと」への注目、「コミュニティの再定式化」が重要な課題となる。コミュニティは解体のプロセスにあるというよりは、さまざまなグローバルなネットワークやフローと共振しながら、場所に根ざした近接性／「つながり」の感覚をベースに据え、そのネットワークの積み重ねが「グローバルな市民社会」の形成と展開をうながしている。

5章では「閉じられたコミュニティ」に回収されない「開かれた都市空間」の可能性を、複数の主体の間で繰り広げられる調整のパターンとしてのローカル・ガヴァナンスに即して検討する。ガヴァナンスとは高度な調整様式であり、複数の領域が交錯するところに成り立つ制度編制／新たな統治様式である。制度編制としてのローカル・ガヴァナンスは、「開かれた都市空間」を是とする、利益／利害が多元的に競合する政治を与件としている。

第II部では、第I部で示した場所理解をジャカル

タおよびデンパサルでの知見を通して検討していく。6章ではジャカルタを例に、アジア・メガシティのいまを、グローバル化、ポスト過剰都市化／ポスト開発、そしてローカリティから捉える。過剰都市化は「生活の共同」／貧困の「共有」を介して、「上から」の組織化費用を肩代わりし、低減させるという形で、「開発」の存続を可能にしてきた。そうした「開発」の存続にとって鍵となったのは、RT/RW等地域住民組織の、長年にわたる「組織経験の蓄積装置」であった。

しかし、通貨危機以降の「外から」の構造調整プログラムによって、分極化、格差の拡大がおり、アーバン・アンダークラスの滞留がおこった。そこのローカリティの内実、すなわち生存戦略のなかみとは、「その場に居合わせること」にもとづきながらも、必ずしも地域完結制に収束していくのではなく、むしろカンボンの多様性、無定形性に基礎し、複数の行為主体による相互作用に貫かれている「開かれた都市空間」であると位置づける。

7章では第I部で提起している「閉じられたコミュニティ」のメタファーとして、ジャカルタ郊外のゲートドコミュニティを取り上げる。ゲートドコミュニティとスラムはアジア・メガシティの多層性と分節性をおよびた階層構造と空間的不平等を基層としている。しかし、それは並存、対立という平面ではなくむしろ両者の重層する輻輳態の上に存立する。

8章と9章では、バリにおけるグローバル・ツーリズムとコミュニティの転態が考察される。まず、グローバル・ツーリズムの進展がもたらしたイスラム化に対して、伝統的なバリを守るために、「閉じて守る」排除の論理にたつアジェグバリの活動を示す。また、人生のある段階で「オルターナティブな生き方」を選びとってバリに越境した日本人の「ライフスタイル移民」の事例を示す。そこには、領域や境界にしばられない新種の移住形態、移民スタイルがあり、流動性や脱統合をキータムとするような日本人社会が出現しつつある。しかし、日本とバリの「あいだ」に立っているようにみえながら日本の「いま」が抱える課題——たとえば高齢化問題—

—に繋留されていることも同時に指摘する。

10章と終章で、これまでの理論と知見をまとめ課題を示す。距離の縮減とともにアジア都市に表出している世界性は、資本の回転速度が空間変容の速度をはるかに上回って世界の空間の意味を変えてしまった結果あらわれたものである。それは絶えず流動し複雑に交錯するさまざまなネットワークが、グローバルなフローとして跳梁することに伴うものである。

東アジア都市回廊は、通貨危機以降、序列化を内包した都市間競争を基調としながら国家を越えるインターシティ・ガヴァナンスが進展し、熾烈な都市間競争が跳梁する場となった。都市間競争と同時に都市内部でも競争と分断がおこり、空間リストラクチャリングにより富裕化と貧困化がすすんでいる。アジア・メガシティにある種の均質な風景をもたらしているのは、東アジア都市回廊そのものが「ワシントン・コンセンサス」、すなわち事実上、IMF・世界銀行を通じた世界標準化の強制に丸ごと包絡されたことの結果なのである。

著者は、本書で取り上げたバリのムスリム、東京やジャカルタの最貧層、ジャカルタのミドルクラス、バリのライフスタイル移民などを都市間競争の多様な帰結のひとつのメタファーと捉えて議論をすすめる。

国家を越えて交錯し相互作用するアジア都市のいまは、作動そのものの互換性と創発性がメルクマールとなる機制^{メカニズム}によって深く特徴づけられ、都市間競争の裾野にまで深く及んでいる。その互換性と創発性の機制が作動する世界性の成立場において、ローカリティの発現形態を問う。それは第1に、ナショナルリティの再鼓舞につながるローカルからのリアクション、第2に市民社会を創建しようとする試み、第3にはグローバルシティの両義性メタファーである同一化の中の差異、差異化の中の同一性である。

近接性への憧憬を始源とする、「囲むこと」の病理は、とりわけゲートドコミュニティにおいて、個人化のゆきすぎた形態である「身勝手な野蛮」を介して「セキュリティの過剰化」をもたらしている。これに対して著者の場所理解は、「住むこと」が

人と人、人と物の『あいだ』で五感を駆使した空間の身体的領有によってはぐくむ可能性をひろげる方向」を志向していることにある。「根づくこと」と「囲むこと」は二重写しであるこの動向に対して、社会諸関係や社会諸過程が内にも外にも展がるなかで、多様な経験や理解がネットワーク上に重なり合って「住むこと」が構成されるといった可能性を著者は問いかける。すなわち本書の場所理解の結論は、場所をゆらぐプロセスの総体として捉えるところにある（260ページ）。ヒト、モノ、コトの複合的なつながりから生じる「一方で開放性を、他方で異質性を」兼ね備えた動的な関係の総体であり、こうした創発態／ネットワークの脱統合的で脱中心的な凝集点が場所なのである。

Ⅲ

最初にも述べたように、本書が掲げた「モビリティと場所」、グローバル化とローカルのパラドクスを追求する課題は魅力的かつ挑戦的であるが、著者もことわっているように困難な課題でもある。本書の読者はまず序章でややとまどうであろう。最後まで読み終えて戻ってみると、確かに全体の概観図となっているが、著者の独特なレトリックによって問いの迷路に陥ってしまうかもしれない。本書の性格上、問いは多く発せられるが、結論はなかなか示されない。結局のところ、著者はグローバル化を流動体のメタファーで捉えるアーリの議論とマッシーのオールターナティブな場所理解によりながら、場所解釈を深めることに本書の大半を割いている。それは多くを問い込んでいく作業であり、著者自身も言及しているように容易に答えが出ないものである。また、アジア都市における複雑な表出形態のため、ジャカルタやデンパサールでの知見のひとつひとつはリアリティには富むが、提示される理論そのままの姿ではないこともあって解釈は難しい。

2章は本書の理論的中心部である。場所理解の脱領域化から再領域化へのパラダイムシフトについて言及はしているが、課題を提示したにとどまっている。終章でも再び「根づくこと／囲むこと」に回収

されていない場所の存立態様「創発態」が提示されるが、人と人、人と物のオールターナティブな「あいだ」の糸口を示しただけだとされる。同様に、4章でも「コミュニティの再定式化」が課題であることは明確であるが、著者の場所理解にもとづく、アジア都市におけるこれからのコミュニティの場所のナラティブは評者の理解不足のためか、十分には伝わっていない印象を受けた。

アジア都市の新しい地平を求めた第6章では、ジャカルタの事例に即して「内部資源」としての「社会・文化構造」＝ローカリティ、すなわちコロニアル以降の共時的「生活の共同」を存立場としながらも、複数の行為主体間の内外の資源の活用にもとづく相互作用／ネットワークから立ち上がる「創発性」(emergence)が提起されるが、本書のかぎりではまだ曖昧な姿しか示されていない。さらに付け加えるならば、さまざまな集合的実践の「^{アーティキュレーション}節 合」から派生する創発サイクルを経て向かう住まうことの動的メカニズム、グローバル化の波にさらされている人が行う脱領域的で脱統合的な創発メカニズムに底礎する集合的実践などで、くりかえし強調される「住まうこと」の中に「生活者」の視点はややかけているように感じられる。

しかしながら、本書を全体的にみて評価すべき点は、著者が課題として掲げた場所理解であり、それをアジア都市の空間を舞台に問い込んでいく知的な旅にあるだろう。日本およびアジア都市の歴史の実証研究を基底に構想される著者の問いは深く、アジア都市の研究者ならば必ずや共有できる問題意識である。表出形態だけでも、発展と格差拡大と世界都市における空間の分極化、新保守主義、自由経済化における市民社会とローカル・ガヴァナンス、地方分権（権力委譲）とNPOのエンパワーメント、地域住民組織（Community Based Organization：CBO）重視の開発政策、さらにグローバル・ツーリズムのもたらす多様なインパクトなど、取り上げるべき課題が多く提示され、著者の場所理解と接合されることで問題性が鮮明になっている。バリにとどまらず、今日のアジア都市にとって、観光は経済の柱のひとつになっている。コンベンション都市、医療観光、

ロングステイなど、交錯するネットワークのもたらす場所性のさまざまな姿が立ち現れつつある。

不可視化するアジア都市の現実から照射する時、都市開発計画における、CBOの取り込みは評者が知っているだけでもタイやフィリピン、中国などの他のアジア諸都市でも実施されている。そこではジャカルタのような歴史的伝統性よりも、上からの支配のディスコースに重ねられた観が強いと感じる。さらに、近年アジアで注目される市民社会論と合わせて、構造調整以降のアジア・メガシティにおけるグラスルーツやNPOセクターの政策への取り込みは、メインストリームになりつつある。しかし、市民社会論のディスコースにみられる欺瞞性、安心安全のまちづくり等にみられる排除の論理など、本書の随所で指摘されている構造調整、ネオリベリズムの二面性の問題は、グローバル化した現代都市社会が抱える喫緊の課題であると言えよう。著者が掲げた格差の矛盾がもたらす問題は、昨春秋以来の世界的経済不況の中で、より深刻な形で現れているのである。また、近年のアジア都市の都市計画の中に、「歴史」、「伝統」の文言が入りつつあるのは、都市の歴史性や記憶を、支配の歴史ではなく文化的歴史のシンボルとして取り込むこと、ヨーロッパでみるような排除の論理と表裏一体であることなど、コミュニティの再定式化の両義性の指摘は鋭いと言えるだろう。

評者が、駆け出しのアジア都市研究者であった頃、アジア地域のベテランの農村研究者から「アジアの農村社会（ローカル）にはそれぞれ歴史に根ざした『顔のある』社会構造があるが、過剰都市化しグローバル化しつつある都市社会（ローカル）はみんな同じ顔をしていないか。アジア農村社会論はあってもアジア都市社会論はあるのか」と問われたことがあった。市場経済化、グローバル化を経て、次々に変貌を遂げていくある種均質な風景を目にしながら、都市社会の議論は、スラム開発や住宅開発、インフォーマル・セクター論などに限定されることが多く、しかも上からの制度研究や、描かれた計画に惑わされがちであった。さらに、ナラティブなものを含め

ても、都市社会のローカルな歴史、関係性の有り様を探る資料は不足している。次々に塗り替えられ、人が入れ替わり、領域を越え社会を越える「モビリティ」のなかで、「場所」の社会論に挑むことは、時間のかかる課題である。本書は、この問いに挑んでいると言えるのであり、グローバル化の中でローカル・ガバナンスを模索しているアジア都市の現代的課題に「創発態」という新しい問いかけをしているのである。

「インテリジェントビルとカンボン、ショッピングセンター・モールとカキリマ（屋台）が隣り合わせて立ち並ぶ景観、そして世界のマクドナルド化とかマドンナ化といわれる事態の進展とともに模倣的なライフスタイル慣習、嗜好、ファッション、コンシューマリズムがあまねく浸透しているゲーテッドコミュニティの風景がポストコロニアルに特有の状況としてありながら、やはり社会の内部にあるさまざまな因子に深く繋留されているという点である。この錯綜した関係は、グローバル化がその内部に取り込んだ『ローカルなもの』の転位を見事に示しているといえるが、その転位の向うにメガシティ・ジャカルタのグローバリティの内実が顔をあらわしているのもまた事実である」（176ページ）、と著者が提起した問題の「はじまり」は確かに共有できる。理論のさらなる深化を望みたい。

文献リスト

- アーリ, ジョン 2006. 『社会を越える社会学——移動・環境・シチズンシップ——』（吉原直樹監訳）法政大学出版社。
- 植田和弘ほか編 2005. 『都市のガバナンス』岩波講座都市の再生を考える第2巻 岩波書店。
- 吉原直樹 2000. 『アジアの地域住民組織——町内会・街坊会・RT/RW——』御茶の水書房。
- 2002. 『都市とモダニティの理論』東京大学出版会。

（淑徳大学総合福祉学部教授）